

実践哲学ノート (18)

谷口 孝男

Notizen über die praktische Philosophie (18)

Takao TANIGUCHI*

Abstract

Die vorliegende Arbeit forscht nach dem Sinn des Menschen als menschliches Naturwesens. Der Kern des Sinnes des Menschen ist aber nichts anderes als Menschlichkeit (Humanität). Also behandle ich die praktische Philosophie überhaupt, namentlich die menschliche praktische Philosophie Yoshiaki Utsunomiyas. Dabei zugleich möchte ich sein Denken selbst und auch seine Denkweise lernen.

Danach möchte ich den Sinn des menschlichen Naturwesens auf Grund der Menschlichkeit (Humanität) aufklären und ferner den Menschen an sich selbst als systematische Totalität der drei Lebenstätigkeiten, die aus Konsumieren, Produzieren und Verkehren bestehen, zeigen.

Der Sinn des Menschen enthält die Menschlichkeit (Humanität) als sein übergreifendes Moment in sich. Daher müßten wir vor allem die Menschlichkeit (Humanität) untersuchen.

【補論6】[孔子の人間らしさ考][]

第二章 仁の本質論

はじめに

「第一章 仁の現象論」において、『論語』についての私の読み方を、やや散文的に示した。また、それが「第一章」の企図でもあった。ところで、『国語辞典』によれば、「意味」とは、「行為・表現・物事の、それが行なわれ、また、存在するにふさわしい、価値」とあり、「生き甲斐」とは「生きているだけのねうち [価値]. 生きている張り合い」とある。「人間の意味」とは、さしあたり『国語辞典』に依拠すれば、「人間が生き甲斐をもって生きている価値」である、と言えようか。同じく、『国語辞典』に依れば、「幸福」とは、「恵まれた状態にあって、満足に楽しく感ずること」とある。端的に言えば、「人間の意味」は「生き甲斐」とも言ってよいが、それは人間の原理(アルケー)としての「道徳(人間らしさ)」と人間の目的(テロス)としての「幸福」からなるもの、と言えるであろう。そして、「原理である道徳」は「理念の厳守」として、「目的である幸福」は「理想の希望」として存在する。人は、だれでもみな、理想の希望のなかで、生きている。しかし、理想の希望は、人間の原理(アルケー)に支えられている必要があるであろう。

「人間の意味」=「道徳」+「幸福」=「最高善」,と表式化できる。

ところで、誰も、「幸福」の内容と追求の仕方が、不道徳であることを、望まないであろう。心の健全な人は、「常識」とよばれる道徳的判断力を身につけている。不正な方法で得た地位・名誉・富などを賞賛する人は、おそらく、いないであろう。つまり、「幸福」の追求の絶対条件(包摂的契機)は、「道徳」なのである。このことは、bekanntではあるが、必ずしもerkanntされているわけではない。言い換えれば、このことは、表象的には熟知されているが、必ずしも概念的に理解されているとは言えない。このような立体的次第であるから、「人間の意味」の概念的闡明に先立って、「道徳」の概念的把握が必要となる。普通一般の人は、たんなる「幸福」を求めているのではなく、「道徳的幸福」(カント『道徳形而上学の基礎づけ』『実践理性批判』)を求めているのである。このようにして、「道徳」あるいは「倫理学」の決定的重要性が浮上してくるのではあるが、それは「幸福のための道徳・倫理学」であることが忘失されるならば、「道徳・倫理学」は浮き草のごときものとなってしまおうであろう。われわれは、「人間の意味」という頑丈な大地にしっかりと根を張っていなければならないのである。

道徳とは、畢竟、「人間らしさ」のことである。「人間らしさ」とは、すべての人間の尊厳(Würde: 絶対的価値・代置不可能性・かけがえのなさ・目的それ自体)を尊重し尊敬すべき(sollen)こと、そしてすべての人間を等しく分け隔てなく愛すべき(sollen)こと、を言う(カント, 宇都宮芳明氏)。この「人間らしさ」の定義を銘記されたい。道徳的諸義務の存立根拠(義務が義務であることの根拠)は、この「人間らしさ」なのである。「定言命法」は「人間らしさ」に変態する。

「人間らしさ」とは、約言すれば、「尊厳と愛」である。尊厳は措くとして、「愛」について一言しよう。カントは、「愛」を、(1) 感受的愛、および(2) 実践的愛、の二つに区別した。感受的愛は、自然の感情によって生まれる愛であり、実践的愛は、たとえ自然の感情が嫌悪感を催そうとも、「愛すべき(sollen)」愛である。この場合、「実践的」は「実践理性的」を意味しているであろう。すなわち、感受的愛は感情や欲望、一口に言って、傾向性に基づく非理性的・他律的愛であり、実践理性的愛は理性的・自律的愛、別言すれば義務意識に基づく愛であろう(宇都宮氏の『倫理学入門』, 200~201頁を見られたい)。恋人や親子の場合にあっても、実践理性的愛を基礎とした感受的愛というかたちをとることが、望ましいはずである。いな、感受的愛は、実践理性的愛を土台とすべき(sollen)なのである。感受的愛のうちで生じる葛藤や軋轢は、相手の尊厳を大切に思う心の有無強弱に結局するのではなかろうか。それゆえ、「親らしい親」ではなく、「人間らしい親」であることが、家庭平和という「幸福」には必要であることであろう。ここでは、『国語辞典』に従って、「愛」を「人を大切に、大事にすること」としておく。因に、カントは「実践的愛」を、「できる限り人に親切にすべき(sollen)こと」と捉えている。

以上に述べたことを念頭に置かれたい。そうでないと、『論語』の森で道に迷うこと必定。

本章で論じる「仁の本質論」は、「仁の現象論」で見た「思慮分別」の発出源である。ここで取り扱われるのは、「忠」、「恕」、「仁」、そして「礼」である。

第一節 「忠」の心

まず、孔子が「忠」を、どのように捉えているかについて、見ておこう。孔子の「忠」とは、「人間の尊厳を尊重し尊敬する心」である、とするのが、私の読み方である。以下、このことを立証しよう、と思う。

(138)

「曾子曰わく、吾、日に三たび吾が身を省みる。人の為に謀りて忠ならざるか、朋友と交わりて信ならざるか、習わざるを伝えしか（私は毎日三回、自己反省する。他人の相談にまごころをこめて乗ってやらなかったのではないか。友だちとの交際に、約束をたがえたのではないか。先生〔孔子〕に教わったことを、じゅうぶん復習せずに君たちに教えてしまったのではないか）」(4, 曾子)

(139)

「季康子問う、民をして敬忠にして勤めしむるには如何にせん。子曰わく、これに臨むに莊を以てすれば則ち敬あらん、孝慈ならば則ち忠あらん。善きを挙げて不能を教うればすなわち勤めん（季康子殿がたずねられた。「国民がおそれかしくまり、まごころをもって奉仕するようにさせるには、どうしたらよかるうか」先生がいわれた。「ご自身が厳肅な態度で接しられたら、国民は自然におそれかしくまるでしょう。ご自身が父母に孝行をつくし、幼少なものに慈愛をかけられたら、国民はまごころをもってつかえるでしょう。ご自身が善人をひきあげ、無能者を親切にみちびかれたら、国民はだまっけても心から奉仕するでしょう）」(20)

*「忠」は「まごころ」、すなわち「誠心誠意」のことであろう。孔子はエゴイスト（フォイエールバッハ）ではなかった。孔子は、つねに、自他の関連の場に身を置き、自他の連繋の理想的なあり方（「仁の世界」、と孔子は言う）を求め続ける。「まごころ」は、他者に対する関係においてしか、存立しないことは、自明であろう。

(140)

「定公問う、君、臣を使い、臣、君に事うるにこれを如何。孔子対えて曰わく、君は臣を使うに礼を以てし、臣は君に事うるに忠を以てす（魯の定公がたずねられた。「君主が臣下をつかい、臣下が君主につかえるには、どういう心がけがあるだろう」孔子がかしくまっけておこたえした。「君主が臣下をつかうのには礼のさだめを守り、臣下が君主につかえるのにはまごころをつくすこととございます」）」(19)

*貝塚茂樹氏の「注」によれば、「中国の忠の原義は、君臣間の忠ではなく、すべて人間としての義務を、まごころをもって果たすことをさしている。もう少し後世になって、臣下の君にたいする義務だけに限定されるようになる。」(テキスト, 100頁)と言う。

(141)

「子曰わく、参よ、吾が道は一以てこれを貫く。曾子曰わく、唯。子出ず。門人問いて曰わく、何の謂ぞや。曾子曰わく、夫子の道は忠恕のみ（先生が曾子をよんでいわれた。「参よ。自分の道は一本を通してきたのだぞ」曾子がこたえた。「わかりました」先生が座を立たれたあとで、門人がたずねた。「大先生のおっしゃったのはどういう意味ですか」曾先生がいわれた。「先生の道は忠恕、つまりまごころと思いやりとにほかならないのだ」）」(15)

*「忠と恕とが一体となっているのが仁なのである。」(「解説」, 116頁)

(142)

「子張問いて曰わく、令尹子文、三たび仕えて令尹となれるも、喜べる色なし。三たびこれを已めらるるも慍むる色なし。旧き令尹の政、必ず以て新しき令尹に告ぐ。何如。子曰わく、忠なり。曰わく、仁なりや。曰わく、未だ知らず、焉んぞ仁なるを得ん。崔子、齊君を弑す。陳文子、馬十乗あり、棄ててここを違る。他邦に至りて則ち曰わく、猶、吾が大夫崔子のごときなりと。これを違る。一邦に至りて則ちまた曰わく、猶、吾が大夫崔子のごときなりと。これを違る。何如。子曰わく、清し。曰わく、仁なりや。曰わく、未だ知らず、焉んぞ仁なるを得ん（子張がおたずねした。「楚の令尹、つまり総理の子文は、三度令尹に任命されましたが、嬉しそうなようすは見せませんでした。また三度令尹を辞任させられましたが、恨めしがるようすは見せませんでした。いつも、もと令尹のときの政策を新令尹に引き継ぎました。どうごらんになりますか」先生はいわれた。「それは忠実だ」また、おたずねした。「仁といえましようか」先生が答えられた。「どうかな。どうして仁者といえるだろうか」また子張がおたずねした。「齊の家老の崔杼が、莊公を殺しました。同じ齊の家老の陳文子は、四頭立ての十台の戦車を出す領地をすてて、国外に去りました。他国に着くと、いいました。『ここも我が国の家老崔君と似た人間がいる』そこでまた国外に去りました。別の国に着くと、またいいました。『ここにもまた、我が国の家老崔君と似た人間がいる』そこでまた、国外に去りました。これなどはいかががでしょうか」先生がいわれた。「清潔だね」子張がおたずねした。「仁といえませんか」「どうかな。どうして仁者といえるだろう」(19)

(143)

「子、四つを以て教う。文、行、忠、信（先生の教育は、次の四つが要点であった。学業、実践、誠実、信義）」(-24)

*たとえば、この章は(27)として、一度引用されている。引用の趣意が異なるので、番号も異ならせた。今後も、こういう場合がある。

(144)

「子張、政を問う。子曰わく、これに居りて倦むことなく、これを行なうには忠を以てせよ（議席についている間はちっとも怠ってはいけない。人民にたいしては、誠意をもって取りはからわなければいけない）」(XII 14)

(145)

「子貢、友を問う。子曰わく、忠もて告げ善もてこれを導く。不可なれば則ち止む。自ら辱むることなかれ（まごころをもって告げ、善をすすめる。しかし、聞き入れなければそこで止める。それ以上に出て自己をはずかしめることになってはいけない）」(XII 23)

(146)

「樊遲、仁を問う。子曰わく、居処は恭しく、事を執りて敬み、人に与わりて忠あれば、夷狄に之くと雖も、棄てられざるなり（ふだんのふるまいはへりくだり、仕事にあたっては慎重で、他人の交際では誠実であれ）」(19)

(147)

「子曰わく、これを愛し、能く勞すること勿からんや、忠ありて能く誨うること勿からんや(愛するからには、いたわらずにいられようか。まごころがあるからには、教えないでいられようか)」(8)

(148)

「孔子曰わく、君子に九思あり。視ることは明を思い、聴くことは聡を思い、色は温を思い、貌は恭を思い、言は忠を思い、事は敬を思い、疑わしきは問いを思い、忿りには難を思い、得るを見ては義を思う(君子には九通りの考え方がある。見るときははっきり見たいと考える。聞くときははっきり聞き取りたいと考える。顔つきは温和でありたいと考える。態度はうやうやしくありたいと考える。ことばは誠実でありたいと考える。仕事は慎重にやりたいと考える。疑わしいことは問いただきたいと考える。怒ったときはやっかいができないかと考える。利益を前にしては取るべき筋合いかどうかと考える)」(10)

これくらいで、間に合うであろう。「忠」は「まごころ」「誠実」のことである。『国語辞典』によれば、「まごころ」は「偽りや飾りのない心。真剣につくす心」のこと、「誠実」は「真心があること。偽りなく、まじめなこと」とある。

さて、「仁」の思想にとって、「忠」は本質的なものである。貝塚茂樹氏によれば、「忠と恕とが結合して一体となっているのが仁なのである」(「解説」, 116頁)とのことである。私も、そのように思う。「第一章」でも、散文的に書いたことであるが、この命題を意味あるものたらしめるには、宇都宮氏の、「人間愛と人間の尊厳の承認とが、人「間」性[人間らしさ]を構成する主要な二契機である」(作品50,「人間」, 59頁)という根本命題を土台として解釈すべきであろう。

「まごころ」にしても、「誠実」にしても、他者に対する態度、もっと限定すれば相手に対する態度のあり方を指示するものであろう。人は、他者に、なにゆえに、「まごころ」をもち得、「誠実」を示し得るのであろうか。他者の「尊厳(かけがえのなさ)」を認めるからであろう。「忠の心」とは「人間の尊厳を認める心」であると見て、大過なからう。道徳とは、畢竟、「心の姿勢」「魂(プシューケー)の姿勢」の問題である。

第二節 「恕」の心、あるいは「愛」の心

「恕」は、「忠」に対して、「人間愛の心」「人を愛する心」を指す。愛すると言っても、自然の感情に基づく感受的愛ではなく、「忠に基づく実践的愛」である。このことに関する、孔子の発言を幾つかとりあげてみよう。

(149)

「子曰わく、参よ、吾が道は一以てこれを貫く。曾子曰わく、唯。子出ず。門人問いて曰わく、何の謂ぞや。曾子曰わく、夫子の道は忠恕のみ(先生の道は忠恕、つまりまごころと思いやりとにほかならないのだ)」(15)

(150)

「子貢問いて曰わく、一言にして以て身を終うるまでこれを行なうべき者ありや。子曰わく、それ恕か。己れの欲せざる所を人に施すこと勿かれ(子貢がおたずねした。「ほんの一言で死ぬま

で行なえるものがありますか」先生がいわれた。「それは『恕』だろうね。自分にしてほしくないことは、他人にしてはならないということだ」)(24)

これほど重要な内容をもった「恕」という言葉が、『論語』でほとんど使われていない。不思議である。それはともあれ、「恕」は「思いやり」の気持ちを示す。そして、「思いやり」とは「自分にしてほしくないことは、他人にしてはならないということ」である(5-12, 12-2をも参照)。『国語辞典』にも、「思いやり」は「他の人の気持ちになって考えること。同情すること。また、その心」とある。同じく『国語辞典』を見ると、「親切」は、「心から思いやること」とある。また、「愛情」は、「相手をいとおしみ、大切に思う気持ち」とある。「恕」は、こうして見ると、「思いやり」「親切」「愛情」などを指すことが推定できる。

カントが「親切」を「愛情(実践的愛)」としたように、孔子も「恕」を「愛情」としたのである。カントの場合と同じく、孔子の場合も、「恕」は、自然の感情の赴くままの感受的愛ではなく、「忠」に基づき、「忠」と一体になった「実践理性的愛」である。

孔子は、「恕」という言葉よりも、「愛」という言葉を好んだように思える。そこで、次に、「愛」の用例を調べてみたい、と思う。

(151)

「子曰わく、千乗の国を導くには、事を敬んで信あり、用を節して人を愛し[愛人]、民を使うに時を以てせよ(戦車千台を戦闘に出す中ぐらいの国家で、これを治める心がけというと、まず、政令を發布するにはよほど慎重で、發布した以上、かならず実行すること。次に、政府の費用はできるだけ節約し、人々をいつくしみ。最後に、農民を夫役にかり出すには、農繁期をさけて適當の時をえらぶことだ」)(5, 現代語訳の傍点部分は「金谷訳」)

(152)

「子曰わく、弟子入りては則ち孝、出でては則ち悌、謹みて信あり、汎く衆を愛して[汎愛衆]仁に親しみ、行ないて余力あれば、則ち以て文を学べ(だれでもひろく愛して)」(6, 「金谷訳」)

(153)

「子曰わく、唯仁者能く人を好し[好人]、能く人を悪む(ただ仁の人だけが、人を愛することもでき、人を憎むこともできる)」(3, 「金谷訳」)

* 「好」は「愛する」の意味のようである。『漢和辞典』によると、「好」は「女と、子とを合わせて、女が幼子を抱きかかえているさま。子をいつくしみ育てること」が原意という。『論語』は、「好」をよく使う。

(154)

「樊遲、仁を問う。子曰わく、人を愛す[愛人]。知を問う。子曰わく、人を知る[知人]。(樊遲が、仁についておたずねした。先生はいわれた。「人を愛することだ」知についておたずねした。先生はいわれた。「人を知ることだ」)(XII 22)

(155)

「子曰わく、教えざる民を以て戦わしむる、これこれを棄つと謂う(教化のゆきとどいていない国民を用いて戦争させるのは、国民を捨てるというべきだ)。(30)

*「何も知らない民を駆って戦争におもむかせている乱戦の中国の状態に、孔子の人道主義ははげしく反発した。」(「解説」, 275頁)

(155)

「君子道を学べば則ち人を愛し[愛人](君子が道を学ぶと人を愛するようになり、)。(4, 「金谷訳」)

以上に見たように、「恕の心」とは、端的に「愛人の心」である。「汎衆愛」なのであるから、人々を分け隔てなく等しく愛する心が、「忠恕」の「恕」であり、そして「恕」は人間の尊厳(かけがえのなさ)を心から大切に思う「忠」を土台にしている、と見ることができよう。このゆえに、われわれは、孔子の「博愛主義」「人道主義」「ヒューマニズム」「人間らしさ」を語ることができるのである。

なお、本節の冒頭において述べたように、道徳にとってはアディアフォラである、「感受的愛」にかんする孔子の発言は、さしあたり省略しておいた。

第三節 君子と小人

孔子の「人間らしさ」、すなわち「仁」を、もっと具体的に捉えるためには、「君子と小人」にかんする問題を、突き詰めて考察する必要があるように思う。この問題に関連した発言を四群に分ける。(A)君子と小人の比較,(B)君子,(C)小人,(D)女子と小人。

(A)君子と小人の比較

(156)

「子曰わく、君子は周しみて比らず、小人は比りて周しまず(りっぱな人間は親しみあうが、なれあわない。つまらぬ人間はなれあうが、親しみあわない)。(14)

*「君子の交わり」「親しき中にも礼儀あり」。「小人の交わり」。

(157)

「子曰わく、君子徳を懐い、小人士を懐い、君子刑を懐い、小人恵を懐う(貴族である君子は道徳の世界を忘れない。庶民である小人は生まれ故郷を忘れない。貴族である君子は法の制裁を忘れない。庶民である小人は主君の恩恵を忘れない)。(11)

*「子曰わく、士にして居を懐うは、以て士と為すに足らず(士でありながら生まれ故郷にひかれる人間は、とても士の仲間に入れられないな)。(3)をも見られたい。「 14」は、参考として。

(158)

「子曰わく、君子は義に喻り、小人は利に喻る（りっぱな人間は義務にめざめる。つまらぬ人間は利益に目がくらむ）」(16)

(159)

「子、子夏に謂いて曰わく、女、君子の儒と為れ、小人の儒と為る毋かれ（おまえは君子らしい貴族的で堂々とした学者となってくれ。小人らしいこせこせした学者にはなってくれるな）」(13)

(160)

「子曰わく、君子は坦として蕩蕩たり、小人は長く戚戚たり（君子はやすらかでのびのびしてる。小人はいつでもこせこせしてる）」(36)

(161)

「子曰わく、君子は人の美を成し、人の悪を成さず。小人は是に反す（君子は他人の善事を助成し、他人の悪事を助成しない。小人はこれと反対である）」(12-16)

(162)

「季康子、政を孔子に問いて曰わく、如し無道を殺して以て有道を就さば何如。孔子対えて曰わく、子、政を為すに焉ぞ殺すことを用いん。子、善を欲すれば、民善ならん。君子の徳は風なり。小人の徳は草なり。草はこれに風を上うるとき必ず偃す（季康子殿が、政治について孔子にたずねられた。「不法な行為をするものを死刑に処し、律儀な人民を育成する政策はどうであろうか」孔子は、かしこまってこたえた。「殿が政治をなされるのに、なぜ死刑を使われるのですか。殿がもしみずから善を欲せられたら、国民は良くなります。なぜかといえば、君子つまり支配者の徳は風にたとえられます。小人つまり被支配者の徳は草にたとえられます。草の上に風が吹いてくると、きつとなびくからです）」(XII 19)

*孔子の「政治論」は、後にまとめて扱うが、彼の「人道主義」は明白である。

(163)

「子曰わく、君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず（君子は他人と心から一致するが、うわべだけ同調することはしない。小人はうわべだけ同調するが、心から一致することはない）」(23)

(164)

「子曰わく、君子は泰かにして驕らず、小人は驕りて泰かならず（君子はのびのびしているが、いばらない。小人はいばるが、のびのびとしていない）」(26)

(165)

「子曰わく、君子にして不仁なる者有らんか。未だ小人にして仁なる者有らざるなり（君子でありながら仁徳に欠けている者もあることはあるだろうよ。しかし小人でありながら仁徳を備え

た者があったためしはない)」(7)

(166)

「陳に在りて糧を絶つ。従者病んで能く興つこと莫し。子路愠りて見えて曰わく、君子も亦窮することあるか。子曰わく、君子固より窮す、小人窮すれば斯に濫す(陳の国において食糧の補給が絶えた。お供の弟子たちは病み疲れ果てて、立ち上がる元気もない。子路が憤然として、孔子にお目にかかっていった。「君子でも困りきることがあるものでしょうか」先生がいわれた。「君子でもむろん困りきることはある。しかし、小人が困りきるとやけくそになるものだ」)」(2)

* 「XI 2」「XI 3」を参考として。

(167)

「子曰わく、君子は諸を己れに求め、小人は諸を人に求む(君子は自己の中に求めるが、小人は他人にたいして求める)」(21)

(168)

「子曰わく、君子は小知すべからずして、大受すべし。小人は大受すべからずして、小知すべし(君子は小さいことはできないが、大きな任務を引き受けることができる。小人は大きな任務は引き受けられないが、小さいことはできる)」(34)

(169)

「孔子曰わく、君子に三畏あり。天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。小人は天命を知らずして畏れず、大人に狎れ、聖人の言を侮る(君子に三種の敬虔さが要求される。天命にたいして敬虔であり、大人にたいして敬虔であり、賢人のことばにたいして敬虔であるということである。小人は天命を解しないのでこれに敬虔でなく、大人になれてずうずうしくなり、聖人のことばを軽視する)」(8)

(170)

「曰わく、君子道を学べば則ち人を愛し[愛人]、小人道を学べば則ち使い易きなりと(君子が道を学ぶと、民を愛するようになる。被治者の小人が道を学ぶと使いやすくなる)」(4)

(171)

「子路曰わく、君子は勇を尚ぶか。子曰わく、君子は義を以て上と為す。君子勇ありて義なきときは乱を為す。小人勇ありて義なきときは盗を為す(子路がおたずねした。「君子は勇気を尊重しますか」先生がいわれた。「君子は勇気より正義を第一にする。君子に勇気だけあって、正義感が欠けているときは、内乱を起こす。小人に勇気だけあって正義感が欠けていると、盗賊を働く」)」(23)

(172)

「子曰わく、性は相近し。習えば相遠ざかる(人間の生まれつきの素質はそんなに差があるも

のではない。生まれた後の習慣によってたがいに遠く離れるのである。)(2)

*「子曰わく、教えありて類なし」(39)

(173)

「子曰わく、唯上知と下愚とは移らず(ただ最上の知者と最下の愚物とは、習いによって変化しない)」(3)

今回は、体裁が悪いが、ここで打ち切る。「君子と小人の比較」において明らかになったことは、(1)君子と小人の区別は、() 道德上の区別、() 特性上ないし品性上の区別、() 政治上の区別、からなることである。(2)さらに、「君子」は孔子の「理想的人間像」である。それは「人間らしい善い人間」つまり「仁を身につけた人間」を指すようである。(3)「君子」という理想(原理的価値判断*)から現実の人間を照明するとき、そこに「小人」としての人間の姿(第二次的な具体的価値判断*、派生的価値判断)が浮かび上がってくるのである。理想の「君子」への接近度・到達度のちがいはあるが、孔子も含めて(たとえば「 30」を見られたい)、人間は一人の例外もなく、みんな「小人」なのである。このように、「君子」と「小人」との区別は、「理想」と「現実」との区別なのであって、たんなる「事実」と「事実」との区別ではない**。

*岩崎武雄氏『哲学のすすめ』(講談社現代新書、66・1)を見られたい。

**「現実」と「事実」との概念的区別については、拙作『マルクス哲学論への前哨』を見られたい。

これ以上述べることは、今は、控えよう。焦ることはない。少しずつ、歩いてゆこう。それが、「実践哲学ノート」の創作スタイルなのであるから。

(続)

【附論】事実概念と価値概念について

本論で、私は、「事実概念」という言葉や「価値概念」という言葉を用いた。それらの用語の意味を、辞書的ではあるにせよ、説明しておくべきかと思われる。

第一章 事実判断と価値判断

第一節 概念と判断と推理

概念とは、言葉・単語のことである。判断は、言葉と言葉を結合したものである。推理は、判断と判断を連結したものである。

私たちの「思考」は、概念と判断と推理の全体から成り立っている。これら三つのものはいずれも重要であるが、「思考」の土台は「判断」である。なぜなら、判断を分解すれば概念になる

し、判断を結合すれば推理になるからである。

第二節 判断には二種類ある

それらは、「事実判断」と「価値判断」と呼ばれている。「事実判断」は、「ある事柄がいかにあるか」を述べる言語形式（命題とも呼ぶ）であるのに対して、「価値判断」は、「ある事柄がいかにあるべきか」を述べる言語形式である。私たちの「思考」は、その半分は「事実判断」から、残り半分は「価値判断」からなっていると見て、よいであろう。

事実判断はいまは措くとして、価値判断には、効用的価値判断や美的価値判断や道徳的価値判断などがあるが、議論を簡素にするために、以下、価値判断は道徳的価値判断に限定する。このことが、たんなる便宜上のものに止まらないことが、徐々にお分かりになるであろう。

第二章 事実判断と価値判断の比較

第一節 すべての人が一致して認めるかどうか

事実は、すべての人が、価値観や見解の違いにもかかわらず、認めるものである。その際、「事実そのもの（原発の危険性）」と「事実の解釈（推進派と反対派）」は、厳密に区別しなければならない。

価値（よいものだから存在すべきもの）は、事実と違って、すべての人の賛同を得ないのが通例である。つまり、価値観は、人さまさまなのが、むしろ健全な状態であるとも言えよう。

第二節 検証可能性と検証不可能性

ある事柄の認識が、ある事柄それ自体に一致しているかどうかを、なんらかの手段・方法で確かめることを、「検証」とか「理論的証明」と呼ぶ。事実は、検証できる。そして、検証の結果、最初の認識（胃癌とか）は「正しい」とか「誤っている」と判定される。

ある事柄の評価の場合、「検証」はできない。Aを美しいと思う人は「正しく」、Bを美しいと思う人は「誤っている」などは、決して言えない。とりあえず、ここでは、価値評価の場合には、「正誤」の判定はありえないことを確認しておこう。

私たちは、正反対の性格をもった二種類の判断からなる思考を日々働かせつつ生きている生き物であることに、神秘すら覚えるのではなからうか。

第三章 価値判断の仕組み

第一節 価値総論

価値は「よいものだから存在すべきもの」のことであった。価値の標識は「べき」にある。事実は、このような「べき」は無縁であった。こう言えるであろうか。私たちが、「べき」という言葉を使うとき、価値について語っているのだ、と（必ずしも「べき」という言葉は用いなくても、「べき」に言い換え可能なものの全体）。

第二節 原理的価値判断

価値判断は、ある事柄が「よいものだから存在すべきもの」と判断するか、それとも、ある事柄が「わるいものだから存在すべきでないもの」と判断するかの、いずれかである。そうすると、価値の標識である「べき」は、「よいものだから」や「わるいものだから」という、それ自身一種の価値評価に基づいている、と言えよう。ある論者は、後者を「原理的価値判断」と名づけておられる。「人間の行為はいかにあるべきか」についての究極的判断が、この人の言われる「原理的」の意味である。最後に簡潔に触れるが、「約束は守るべきである」が、なぜ「守るべき」であるのか。その究極の根拠は何であろうか。このような執拗な問いは、日常生活には無関係であるかも知れないが、文化というか学問はこのような問いを大切にするのである。

第三節 派生的価値判断

原理的価値判断を土台として、さまざまな派生的価値判断が生じる。「理想的男性像」に基づいて、「Aはよい」「Bはわるい」などと判断される。こういう判断抜きに、友人も恋人も伴侶も得られないことであろう。

日常生活において、事実判断的思考と価値判断的思考を区別することは重要であろう。頭が、ずいぶん明晰になるように思える。

第四章 「知ること」と「信じること」

第一節 思考の二つの働き

人間の思考には、「知る」働きと「信じる」働きの二種類がある。事実判断は「知る」働きにより、価値判断は「信じる」働きによる。「知る」ものは、五感を通過したものに限られる。それに対して、「信じる」ものは、五感を通過していないものに限られる。

第二節 「信じること」の「知ること」に対する優位性・包摂性

「知ること」は「いかにあるかの知識」、「信じること」は「いかにあるべきかの知恵」と言えよう。さらに、前者は科学、後者は哲学と言ってよいであろう。科学的知識において働いている思考は「知ること」であり、哲学的知恵（道徳）において働いている思考は「信じること」である。「人生をいかに生きるべきか」という価値判断、すなわち哲学的知恵の思考は、さまざまな事実判断、すなわち科学的知識を素材なり原料なりとしながら、理想像に照らしつつそれらを変形加工しつつ、人生を創造してゆくものである。つまり、「信じる思考」は「知る思考」を包み込むのである。

第五章 人生を導く原理的な道徳的価値判断（要点）

第一節 人生と道徳

人生はたしかに複雑なのである。反面、私たちがわざわざ複雑にしている点もあろうか、と思う。端的に言えば、人生の根本（原理）に道徳を据え置いていないように見受けられる。人生とは、つまるところ、行為と行動からなるものであるから、行動の根本方針を樹立すれば、人生

はもう少しは愉しく涼しいものとなるであろう、と思う。

第二節 人間らしさ

人間らしさ(博愛)は、原理的な道徳的価値判断である。「すべての人間の尊厳(絶対的価値・かけがえのなさ・代置不可能性・目的それ自体)を尊重し尊敬し、すべての人間を等しく公平に分け隔てなく理性的に愛すべし。」この「人間らしさ」が「人間の究極目的」だと言えよう。「人間らしさ」を、*かたんに*、「人間の敬愛」と、一口に言うこともできよう。

*イエスの隣人愛と敵への愛。カントの感受的愛と実践理性的愛。ベルクソンの閉じた愛と開いた愛。家族や職場の人間関係の見方。

なぜ約束を守るべきか、なぜ嘘をつくべきではないのか、と言えば、約束を破り、嘘をつけば、相手の尊厳を傷つけるからである。私たちは、人から「物扱い」されることを侮辱とみなし、「人間扱い」されることを望むであろう。私たちには、当然にも、自己の尊厳の意識があるわけである。孔子は「己れの欲せざる所を人に施すこと勿かれ」と語り、イエスは「自分がしてほしいことを人にもしてあげなさい」と諭した。

人間らしさの定義に「べし」が入っている。だから、人間らしさは、当然、事実判断ではなく、価値判断なのである。「人間らしさ」は、価値概念として、「信じる思考の働き」の所産なのである。